

(別紙2)

審査結果の要旨

氏名 佐藤 康邦

『カント『判断力批判』と現代――目的論の新たな可能性を求めて――』と題されて公刊された佐藤康邦氏の博士号申請論文は、カントの著作のなかでも際だって錯綜し、それ故にこそまた、このうえなく豊かな内容をたたえる『判断力批判』(いわゆる第三批判書)を正面から採りあげ、その錯綜した脈絡を解きほぐしつつ、その主題である目的論の現代的な意義と可能性を証示したものである。

第一章においては、カント以前の目的論の系譜が歴史的にたどられ、第二章において、『判断力批判』に先立つカントの主著である『純粋理性批判』(第一批判書)および『実践理性批判』(第二批判書)での目的論の内実が論じられる。

第三章以下が、『判断力批判』そのものを論じる、いわば本論だが、本章において、目的的概念(「合目的性」)に直接関わる「美的(直観的)判断力」および「目的論的判断力」という二種類の「反省的判断力」、ならびに、「構想力」という、錯綜する主要諸概念が、カントの提示する、これまた錯綜する体系論のうちに正確に位置づけられる。そして第四章において、「美的(直観的)判断力」――いわゆる「趣味判断」――が、今日の科学的形態論、構造主義生物学、J.J.ギブソンの「アフォーダンス」論等の認知科学、さらには、ルネ・トムの数学論等をも見据える広い視野のもとで論じられる。

第五章は、一旦『判断力批判』を離れて、『純粋理性批判』に立ち返り、ここにおいて論じられるべきであったとされる目的論を主題化するが、第六章において、再び『判断力批判』に戻って、重要な目的論のひとつであるカントの有機体論が、現代のオートポイエーシス論等との関連で論じられる。また、第七章においては、「全体」(「目的」)を把握するということ(「目的論的判断力」)が主題化され、カントの「神の知性」論が論じられるとともに、再びカントの議論とギブソン等による現代認知科学との関連性が提示される。

第八章は、いわゆる進化論をも包摂しうるとされるカントの生命論を主題とし、現代生命科学による生命操作に対する疑念の哲学的根拠が、この生命論のうちに読み取られようとする。そして最終章、第九章において、「世界の究極目的」を「道徳的主体としての人間」とし、また、「最終目的」を「幸福」と「文化」とする、カントの「究極目的」、「最終目的」論が再吟味される。

以上の論述は、『判断力批判』で展開されたさまざまな論点を、目的論をめぐる広い哲学的視野のもとに総括するものであり、そのことの故にまた、個々の論点を見れば、時になお展開の余地が残されてはいる。しかしそれは、カント研究に対し、総じてこれまでにない地平を拓くという、本論文の高い評価をいささかも減じるものではない。

よって、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに値すると判定する次第である。